

# DT-1

1968年 / 市販車

1965年当時、日本製品の品質が各国で認められたことで、輸出産業に大きく貢献し、貿易収支は黒字基調に転じることとなった。

ヤマハ発動機は1960年代にトレールマスターの名でオンロードモデルベースのモデルを米国向けに開発していたが、1965年に開発された単気筒250cc エンジンのモトクロッサー YX26と並行して、DT-1は市販車として、空冷2ストローク246cc、最高力18.5ps/6,000r/min、112kgの車重というスペックで設計された。4.00-18の幅広リアタイヤは当時の四輪トラックなみで、国内で二輪用には存在せず、タイヤメーカーと協力して専用の極太タイヤを作り上げた。パールホワイトにピンストライプの入ったタンクの塗装は、アコヤ貝をフレーク状にして発色を研究し、3回塗装して2回焼き付けたストライプ表現など、ピアノ塗装で培ったヤマハならではの技術革新を成し遂げた成果といえる。

スリムでコンパクトな車体を実感できるよう、マフラーを含め、徹底的に車体幅を詰めたデザインは、オフロードモデルの基本思想として現在も受け継がれている。

